

小学生のころ、近所にあった「忠魂碑」の前が広い公園になっていて、そこで友達と縄跳び、ドッジボールなどに興じることがあった。夕暮れになると誰かの母親が「もう、帰りなさい」と迎えに来ることもあった。

そんな広場の隅に木の皮を剥いたようなものが広げられているのを目にした記憶がある。誰からともなく「楮だ、三楮だ」と言っているのを聞いた。どこかの山から採ってきたものだろうが筵むしろに皮を剥いて干したのは誰だろう。それをこれからどこに納めるのだろう。そんなことを考えた。何年か後、それはお札を作るものだとか、和紙になるものだとか、楮と和紙のつながりを知った。

楮、三楮は和紙の原料。外皮の下にある柔らかい内皮の繊維が和紙の原料となる。それだけに繊維の長さ、強さ、光沢、厚さ、薄さなどその性質、特徴によって紙は使い分けられる。楮は繊維が強くて長い。よって古くから障子紙をはじめ美術用、表具用など広く使われている。主な産地は「阿波和紙」と呼ばれるように徳島県、高知県だ。今ではタイ産がほとんどになっているらしい。日本での生産量が激減したこと、タイ産が圧倒的に安いことが考えられる。

近所の里山に小学校教育に利用されている小さな畑がある。ある年の早春、真っ白な蕾をつけて、すべての枝が「三つ」に分かれた木を見た。枝が必ず三楮に分かれているのだ。これがその名の由来だと直感した。三楮を原料とする和紙は艶が美しく丈夫で艶があるため紙幣や高級和紙をつくるのに適している。繊維が短く、紙のキメが細かいので印刷しても鮮明で最高級のかな用和紙になるといふことだ。

大歩危の花三楮の頃を旅

岡西 恵美子

三楮は春を告げる花としても知られ薬玉のような丸い花をつける。外側は白く内側は濃い黄色で、淡くどことなくいい感じの佇まいがあり、茶花としても愛好家も多い。また俳句の題材としても大変な人気がある。